屋根も壁もない・・・市内が全部博物館・・・・・

ふるさと発見 ちがさき丸ごと博物館

第39号
2024.11.1

愛称は「ちがさき丸ごと博物館」

丸博百景№.３　茅ケ崎里山公園「平成の森」に誘われて　　※丸博百景では誰でも自由に入れる景勝地を紹介します。

茅ヶ崎のまちに新しい波を起こした黎明期の人々とそのつながり

～純水館館主小山房全の家族の南湖院への入院、南湖院副長の高橋誠一、純水館誘致に動いた町長伊藤里之助、避暑地茅ヶ崎の別荘を訪れていた小山敬三のすべてを今号で知る。～

茅ヶ崎の近現代は国の大きな変革の流れと共に、正にその支流のように半農半漁の小さな村が町となり、人口２４万の地方都市へと変貌を遂げてきました。温暖な気候と首都圏という恵まれた地の利と共に、その過程には茅ヶ崎を愛した人達がいました。

茅ヶ崎停車場の開設、別荘文化の開花、南湖院の開設など茅ヶ崎のまちの近代化への黎明期に行き交ったヒト・モノ・コト。伊藤里之助（初代町長）、小山房全（純水館茅ヶ崎製糸所館主）、小山敬三（画家・名誉市民）、高橋誠一（純水館嘱託医・恵泉幼稚園創設者）・・・。

遥か茅ヶ崎の未来を見つめた人たちの挑戦を私たちは忘れてはならないでしょう。

注目の都市資源！！

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館では、文化や自然、産業、人材など市内のさまざまなまちの宝物を「都市資源」と呼んでいます。

今回は茅ケ崎駅北口にある「純水館記念碑」、茅ヶ崎市南部にある「旧南湖院第一病舎」、そして市民文化会館大ホール第一緞帳（どんちょう）と関係する画家・小山敬三をご紹介します！

「純水館記念碑」…①

純水館は、大正から昭和初期にかけて、茅ケ崎駅北口で操業していた製糸工場です。現ヤマダデンキ茅ヶ崎店付近を中心とした敷地約12,000坪、従業員約350名が働く大工場として、館主の小山房全（ふさもち）により大正6年に操糸（生糸生産）を開始しました。

大正12年、当時の皇太子（後の昭和天皇）のご成婚に向けて、純水館が唯一選ばれた製糸工場として全国から集められた繭を操糸していました。純水館の広い工場内には庭球場や運動場もあり、映画会や夏の盆踊り大会は茅ヶ崎町民も参加する一大行事でした。「糸も作るが人も作る」と評された房全は、従業員一人ひとりを大切にした模範工場の経営者として名を馳せます。

しかし、同年9月の関東大震災により、工場は全壊、館主夫人の喜代野も震災死されました。長野県小諸の房全の義父小山久左衛門や横浜の渋沢商店（廻米問屋、生糸問屋）などの支援の下、翌大正13年に操業を再開し、皇室への献上操糸を無事果たすことができましたが、震災後の工場再開による莫大な負債、人絹（じんけん）（天然の絹糸を似せて作った化学繊維）の消費拡大、絹糸価格暴落、昭和恐慌等の激動期と房全の病死が重なり、昭和12年に純水館は20年の歴史に幕を閉じることになりました。

このような純水館茅ヶ崎製糸所の歴史を伝える記念碑（歴史掲示板）が、純水館講演会実行委員会と市民の浄財で令和4年12月にヤマダデンキ茅ヶ崎店北側の芝生広場に建立されました。皆様も是非この記念碑を訪れ、100年前の茅ヶ崎に思いを馳せてみませんか。

▲第一病舎は外観のみご覧いただけます。

国登録有形文化財（建造物）

「旧南湖院（なんこいん）第一病舎」…②

「南湖院記念　太陽の郷庭園」は旧南湖院跡として、平成２８年、第一病舎と周辺の土地を合わせて茅ヶ崎市に寄贈され、無料公開されています。この第一病舎（竹子室（たけこしつ））とその周辺の景観は、茅ヶ崎における重要な都市資源といえます。南湖院は今から125年前の明治32年に高田畊安（たかたこうあん）がこの地を選び結核療養所を開設したことに始まります。東洋一のサナトリウムと謳われ、最新設備を備えた最盛期の南湖院は約5万坪という広大さでした。

しかし、南湖院は米軍の上陸に備えるべく大日本帝国海軍に接収され、病院としての歴史は閉じられました。戦後米軍に接収され、解除後、畊安の孫の故高田準三氏が有料老人ホーム「太陽の郷」を設立し現在に至ります。創建から今日に至るまで、建設当初の姿で遺されたことは奇跡的なことと言われています。南湖院としての面影は、開設当時の姿を残す第一病舎の他、ひょうたん池、門柱などや畊安訳の「イエサヤ予言／第9章5節、6節」を刻んだ碑が県立西浜高校との境界フェンスの際にあります。

南湖院の入院患者で「茅ヶ崎」の地名を一躍有名にした国木田独歩をはじめ、関係者としては多くの著名人（坪田譲治・平塚らいてう・八木重吉など）や、茅ヶ崎ゆかりの人（小山房全・高橋誠一・伊藤里之助）など多彩な人物が関係し、南湖院は茅ヶ崎の近代化や文化・経済に大きく貢献してきました。

「小山敬三と市民文化会館の緞帳（どんちょう）」…③

▲新たなクリーニングにより美しさを取り戻しました！

画家・小山敬三は、明治30年８月11日、長野県北佐久郡小諸町に、製糸工場純水館の経営者である父小山久左衛門正友と母梅路の三男として生まれました。（大正6年、操業を開始した純水館茅ヶ崎製糸所の館主小山房全の妻喜代野の弟です。）父は富岡鉄斎と親交があり、敬三も鉄斎の墨蹟（ぼくせき）に接し、絵画を学びました。

南湖にあった小山家の別荘は母親の喘息のために建てられたものです。敬三は小諸にいた幼少の頃から、避寒の地として母と南湖の別荘を毎冬訪れていました。父は横浜の生糸貿易商・渋沢商店に商用があると別荘に泊まりました。敬三は別荘で、画家になることを反対する父と三日三晩話し合ったといわれています。茅ヶ崎のアトリエはフランス留学から帰国後、昭和4年、別荘内に建設されました。このアトリエから、代表作「白鷺城(姫路城)シリーズ」など数々の名作が生まれています。

昭和7年、茅ヶ崎海岸の浜降祭を描いた「海浜祭日」を制作。これが、市民文化会館の緞帳(どんちょう)の原図となっています。昭和9年には、湘南遊歩道（現、国道134号）と、付近の海岸風景を描いた「茅ヶ崎風景」等を制作しています。

昭和50年文化勲章受章。昭和51年茅ヶ崎市の名誉市民に。昭和62年、茅ヶ崎にて89歳で死去しています。長野県小諸市に小山敬三美術館があります。

※今回ご紹介した都市資源は
こちらでご覧になれます。

③緞帳（どんちょう）（市民文化会館内）
：茅ヶ崎1-11-1

①純水館記念碑
：ヤマダデンキ茅ヶ崎店付近

②旧南湖院第一病舎
：南湖7丁目12869番地

【報告】「丸博講座（基礎編）第１６期」が始まりました！

▲締めくくりには茅ヶ崎市の地名で「ちがさき丸ごとビンゴ」。大盛り上がりの中、第１回講座は終了しました。

１０月４日から始まりました本講座（基礎編）、丸博館長（茅ヶ崎市社会教育課長）のあいさつの後、社会教育課職員によるオリエンテーションで受講者は「丸博」とは何かといった基本的な事項から講座を楽しんでいただくポイントなどを学びました。

「都市資源とは？」「エコミュージアムとは？」、そして「丸博活動の楽しさとは？」・・・。

初めて聞くことばかりだと思いますが、きっと自分が住むまち・茅ヶ崎のことが好きになるヒントを得たことと思います。

私たちの住むまち・茅ヶ崎のことを丸ごと知ることができる本講座、次年度は是非ご参加ください！

トピックス　珍しくなった赤とんぼ（アキアカネ）

市民には夕方のメロディーとしてもおなじみの童謡、「赤とんぼ」は三木露風の作詞、茅ヶ崎にゆかりのある山田耕筰の作曲です。その赤とんぼの代表、アキアカネが1990年代の後半頃から全国的かつ急激に減少しているといわれているのをご存じでしょうか？　最大の原因はネオニコチノイド系農薬とされており、他にも水田の乾田化や耕作放棄地の増加などがあげられています。

皆さんの実感としてはいかがでしょうか？　身近な場所でアキアカネを探してみませんか？

トピックス　茅ヶ崎市の茅ケ崎駅

普段はあまり気にすることがない、「ケ・ヶ」という文字。この街では、多くの場合は小さな「ヶ」を使用していますが、JR線では正式表示を大きな「ケ」に統一しているために、プラットフォームは「茅ケ崎」、駅舎は「茅ヶ崎」という不思議な状況になっている事をご存じでしたか？

この「ケ」と「ヶ」、一般的にはカタカナと混同されないために、小さな「ヶ」を用いることが多いようです。

ちなみに、横浜市都筑区の「茅ケ崎」は、大きな「ケ」が正式との事…。

今月の人！　丸博ゆかりの人物紹介　伊藤里之助（いとう　さとのすけ）

伊藤は、茅ケ崎駅開設に尽力しました。1895（明治28）年、茅ヶ崎村と鶴嶺村で会合を開き、茅ヶ崎村長であった伊藤は山宮藤吉鶴嶺村長とともに、願書を起草しました。その願書では、「鉄道停車場ノ多キハ人民ノ交通貨物ノ運輸ニ最モ利便ヲ与ヘ・・農工商ノ隆盛ヲ致シ土地ノ盛衰ニ影響スル」と、駅の開設による鉄道利用に期待した上で、「東海道線路中藤沢・平塚両停車場ノ距離九哩（哩はマイルなので、約14.4キロメートル）余ノ遠キニ及ヒ、本線路中多ク其比ヲ見サルノ遠距離」と、藤沢・平塚両駅間の距離が特に長いことを訴えていた（「鉄道停車場設置願」）と、市史ブックレット10の「茅ヶ崎駅の一世紀」に記載があります。ちなみに、伊藤里之助は駅の誘致に際し、別荘地に好適地であると伊藤博文に陳情を行ったともあります。別荘地化による地域の活性化を図ろうと考え、別荘用地取得の斡旋、建築工事の手配、持ち主不在中の別荘管理まで行い、明治末には別荘の数が200超になったそうです。別荘地化に伴い海水浴場が賑わうようになり、旅館、貸別荘の増加など、今日の茅ヶ崎の発展の礎を築きました。そのほか、相模川の砂利運搬目的の鉄道計画や、純水館茅ヶ崎製糸所の敷地取得の斡旋を行っていたと言われています。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館ってなに？

2003 年よりエコミュージアム（※）という理念のもと、茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材（もちろんあなたも）などの「このまちらしさ」をもつ、いろいろな事柄を幅広く選び出し、これらの都市資源を調査・研究し、それぞれを関連付けて活用を図るのが、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」です。この活動を通じて茅ヶ崎を知り、茅ヶ崎を好きになり、茅ヶ崎を誇りに思う人を増やし、まちの活性化につなげていきます。ぜひ皆さんも私たちと一緒に丸博に参加しませんか。

※エコミュージアムとは、地域環境そのものが博物館であるという考え方で、運営する者も利用する者も、地域住民であることが大きな特徴です。

編集後記

今号は関連する３つの都市資源を採り上げましたが、一つの都市資源を知るところから別の都市資源につながり、結果、枝葉が広がるように学びを深めたいものですね。気がつけば、令和６年度も上半期が終了し、一気に秋めいてきました。第一面に掲載した丸博百景のように、まち全体が赤や黄色に色づくのももうすぐです。これからは散策にピッタリの気候となります。あなただけの紅葉を探しに、さあ、出掛けましょう！（編集スタッフ一同）

発行・編集　茅ヶ崎市教育委員会教育推進部社会教育課　ちがさき丸ごとふるさと発見博物館アクションプロジェクト
〒253-8686　茅ヶ崎市茅ヶ崎1-1-1　☎0467-81-7226　バックナンバーは　ちがさき丸ごと 季刊誌　検索
HP はこちら